

おわりに

本書の執筆者のほとんどは、「筑波山ルネサンス」に属している。「筑波山ルネサンス」とは、平成一七(二〇〇五)年筑波大学人文社会科学研究所(当時)において、社会連携プロジェクトの一環として、筑波山を中心とする環筑波山地域の地域活性化のサポートを目指してつくられたものである。

ついこの間でできたプロジェクトだと思っていたものが、もうすでに九年が経っている。改めて軽い驚きを感じる。平成一七(二〇〇五)年というのは、つくばエクスプレス(通称TX)が開通した年である。TXは、当初東京への通勤客をその需要の中心として見込んでいたが、同時に茨城県の他地域を含む首都圏各地から多くのビジターがTXを利用して筑波山を訪れるようになった。

このTX開通による地域世界の変化というものに合わせ、あらためて環筑波山地域の活性化がテーマとなってきた。そうした流れの中、「筑波山ルネサンス」も設立されたのである(筑波山ルネサンス編『シンポジウム筑波山ルネサンス―つくば市民の文化的アイデンティティを求めて』二〇〇六年)。

メンバーの一人、筑波大学人文社会系の早川公非常勤研究員は、設立当初から大学院生として北条地区に、研究の対象としてのみならず、地域活性化の実践の場として関わってきている。現在NPO法人「矢中の杜」の守り人として理事長を務め、地域の人々とともに北条地区の活性化の一翼を担っているといえよう。

同時に筑波山麓地区では、筑波大学としては早くから、建築家の安藤邦廣名誉教授(芸術学群)が、里山保全の見地から里山建築研究所を設立し、古民家の保全や修復を行ってきた。

また、筆者はこうした地域活性化の動きのなか、つくば市から観光基本計画の策定を依頼された。その成果は、『つくば市観光基本計画』(二〇一二年)として結実しており、基本計画をもとに、観光という観点からつくば市

の活性化の施策を推進しているところである。

観光基本計画策定委員会には、現筑波学院大学学長の 大島慎子教授が副委員長として参画しており、滝川クリステルの東京オリンピック誘致のプレゼンテーションでブームとなった「おもてなし」、そしてより高次のホスピタリティの重要性をいち早く指摘し、基本計画の四つの柱の一つとしている。

環筑波山地域の中心ともいえる、山麓地域における地域づくりの課題の一つは、地区を越えた山麓地域としての一体化で、「筑波山麓秋祭り」の展開はその目に見える回答の一つといえよう。毎年、ウイーンフィルのメンバーにより、北条の「宮清大蔵」で演奏会も行われている。その地域づくりイベントとしてのレベルは、全国レベルといってもよからう。また、近隣の宝篋山を歩く人の数も桁違いに増えている。今、地域づくりは第二ステージに入ったともいえる。そして、第二ステージにはそれなりの課題があると思われる。

観光基本計画の四つの柱のうち一つとして、フットパスの導入・展開がある。フットパスは一昨年来、日本経済新聞などに「現在、注目されているトレンド」の一つとして取り上げられ、大手百貨店のパンフレットにも特集として取り上げられるようになっていた。多少の驚きの感はあるが、こうした地に足のついた新たな観光が目されるようになってきた背景には、機能主義的マス・ツーリズムからの脱却がある。そして、オルタナティブなツーリズムへの模索の時を経て、今、自然と文化が合一した里山や里人の生活に自然体で触れる新たなツーリズムの構築という時代性が反映しているといえよう。「つくばスタイル」という言葉もすでに市民権を得ていると思われるが、フットパスは、登山やウォーキングとはまた異なった、地域への関心とコミットメントを生むものである。「つくば」と「筑波」といわれる地域空間の境界を超えて、新たな発展を期するものもフットパスのような身近な経験であるに違いない。すでに二つのコース・マップ作製と道標の設置が行われており、引き続き新たなコースづくりに取りかかっている。本書の各章で示された世界を思い浮かべながらフットパスを実際にめぐっていたら、時間を越えた空間が経験できることと思う。

最後になってしまったが、筑波山麓全域にわたる地域づくりといえ、井坂敦実氏の名を知らない人はいないであろう。平沢の遺跡保存の運動をきっかけに郷土史家となった氏は、かつての筑波町の町長、筑波町がつくば市として合併した後はつくば市の教育長をつとめており、最近まで筑波山麓地域づくり団体連絡協議会の代表でもあった。

筆者もこれまで学生の野外調査などでお世話になったが、生きた歴史と文化のつくり手であり、筑波の歴史の証人でもあろう。本書では特別寄稿として、第一章の「筑波の歴史と文化」の章を担当して頂いている。

設立当初、井坂氏に問われた言葉を今思い返している。「かつて筑波に大学ができるということを知っていて、地元民は大学が地域に関わってもらえると期待した。だが、筑波とつくばの違いがあるように、期待したほどの関わりは持ってもらえなかった。役所にも筑波大学の卒業生の数はほんのわずか、つくば市に残る卒業生もきわめて少ない。まして、地元の人と結婚して、筑波地区に永住する卒業生は皆無である」と。

そのとき、「これから五年、一〇年単位でみていってください」と応えた筆者も、実は二十数年前に筑波大学に赴任してきた際のことを思い出さざるを得なかった。当時、設立から二〇年近くを経た筑波大学は、地元の大学として筑波地域の歴史や民俗、文化の調査・研究に力を入れているものと思っていた。むしろそれなりの理由があるのだが、実際に研究対象としているのはむしろ遠方の別の地域であったりして、多少の驚きがあった。学生にいたっては、筑波山麓地域についての知識は皆無に等しく、行ったこともないのが普通であった。しかし、現在では卒業生が種々の形で、つくばだけでなく筑波に関わりはじめ、地域づくりの支えになってきている。

遅ればせながらという感もあるが、筑波大学には各分野の専門家がおり、筑波山ルネサンスのメンバーは環筑波山地域をも研究対象としている。歴史や民俗、文化、社会経済の研究が、地域資源の発掘につながり、地域研究と地域づくりの実践とが合体して、この地域の活性化の後押しをしていけたらと思うている。

また、本書が今後のルネサンスのメンバーや協力者による、「環筑波山文化圏」に関する単行本の出版に向けた起点になればと思っている。

筑波大学 「筑波山ルネサンス」代表 前川啓治

謝辞

平成一七年に「筑波山ルネサンス」を立ち上げた出口正義教授（現専修大学）をはじめ、学内外の多くの専門家が、講演会やシンポジウム、ワークショップなどにおいて、地域活性化の提言を行ってきました。また、各区のタウンミーティングでは、地元の方との対話を重ね、何が必要なのかを問うことによって、なにがしかの形で、地域づくりの想いを掘り起こすきっかけをつくることができましたのでは、と思います。

筑波山麓地域の中心で活性化を進めてきた北条地区会長の坂入英幸氏、小田地区で情熱的に宝篋山の再興に取り組んできた東郷重夫氏、新たな視点で地域活性化を進めている筑波山旅館組合青年部部长蔵本剛氏、また早くから地域に応じた地域活性化を具体的に提案してきたつくば市役所の小神野洋一氏をはじめ、時々の観光物産課の担当者の方々、つくば市商工会の松信利彦氏にこの場を借りて、感謝申し上げます。

また、「矢中の杜」はじめ、「平沢歴史文化財フォーラム（代表 金久保尚氏）」「環境フォーラム（代表 田中ひとみ氏）」「自然生クラブ（代表 柳瀬幸子氏・柳瀬敬氏）」、さらに谷田部地区、荃崎地区の地域づくりを着実にすすめている方々および各地区の区長さん、また県民講座受講生のみなさん、フットパス設定ワークショップのメンバーのみなさん、との意見交換も大変有益でした。ここに書ききれない多くの方々とのこれまでの交流が、この編著をきっかけにさらに展開していくことを期待しています。環筑波山文化圏は、狭義の筑波山麓周辺に限

りません。筑波山を中心に広域にわたる文化圏という視点から、つくば市をはじめとした近隣諸地域が連携しあって発展していくこと、また今後の女性による、より積極的な地域づくりへの参画を期待しております。筑波山地の活性化を、独自の視点からサポートしている野末たく二氏、山崎かのこ氏等とともに見守っていききたいと思います。

なお、出版に際し、筑波大学出版会の担当、飯塚桂子さんおよび安田百合さんに原稿の細部にわたる確認を行って頂きました。フットパス・マップをカバー裏に印刷するという画期的なアイデアは飯塚さんによるものです。また、地図の加筆は芸術専攻の大学院生大竹英理耶さんに引き受けて頂きました。フットパス・マップはつくばフットパスチームの江口肇氏および内田初萌氏の作成によるもので、つくば市観光物産課から提供して頂き、また第一章の写真1-4、1-6、図1-4は、つくば市教育委員会文化財課から提供して頂いたものを掲載しています。

さらに、同文化財課を通じ、写真1-5は小山文顯氏（北条内町第一区長）、写真1-7は平澤仁誉氏（長久寺住職）、写真1-8、1-9は満川貞夫氏（小田中部区長）から掲載の許可を頂きました。また、第四章の写真4-1、4-2は武井基晃氏、第五章の写真5-1は常陽藝文センターによる撮影・提供であることを明記し、以上の写真掲載を快諾して頂いた方々および組織に感謝の意を表したいと思います。

【注】 本書の本文（歴史記述）の文章表現には、今日からみれば不適切と思われる表現がありますが、作品の時代背景および作者が故人であることなどから、原文のままとしていますので、ご了承ください。